宇宙コネクト～喫茶語り～

イッセ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カフェ「Ｃｒｕｉｎｎｅ」。そこは変わった常連客が訪れる喫茶店。

今日も俺は好物のアールグレイを飲みながら、変な顔なじみととりとめのない話をする。　さて、今は誰がいるのやら。

目次

1話　カフェ「Cruinne」――――――1
2話　カラフルな顔見知り――――――5
3話　チュパカブラ――――――9

1話　カフェ「Ｃｒｕｉｎｎｅ」

「喫茶店はいいものだ。」

注文したアールグレイを飲みながら、俺はしみじみと思う。

普通の飲食店とは違う落ち着いた雰囲気。

飲食を楽しむお客たちも、騒がずそれぞれがこの雰囲気を楽しんでいる。

元々、在宅作業をこなす中で家以外の作業場所を求め行きついたのが、このカフェ「Ｃｒｕｉｎｎｅ」なのだが、このクラシックな店内にすっかり魅了され、休日も店に食後の1杯を飲みに来るようになった。

そうして、半年以上も店の常連を続けていると、店主はもちろん、他の常連とも顔なじみになってくる。

俺は元々、1人でゆったりとした時間を楽しむタイプの人間ではあるが、こうしてどこの誰とも知らない顔なじみたちと、とりとめのない話をするのも、好きな時間である。

今日店でたまたま出会った顔なじみは・・・・・・・「宇宙人」だった。

「なあ、高宮よお。俺はつくづく思うんだよ。やっぱ地球人っておかしいよな？」

高宮　凛が俺の名だ。

女みたいな名前をしているが、れっきとしたおっさんである。

「いや、スカル。いきなりご挨拶だな。

俺からすれば、人間に紛れて生活するお前の方がよっぽど珍しいのだが。

あれか？俺が知らないだけで、社会にはお前みたいな宇宙人はあふれてるのか？」

スカル。俺はそう呼んではいるが、自己紹介された時うまく聞き取れず、暫定的にそう呼んでいる。

社会人としての偽名はあるそうだが、そっちは秘密だそうだ。

本人？曰く、日本社会に紛れている宇宙人の1人とのこと。

「だってよー。宇宙的にみても人間って結構発達してるぜ？
俺たち宇宙人がこうして、物資を輸入したくなるくらいにはいいもの作りやがる。
それなのに、政府も科学者も俺たちの存在すら認知できてねえ。
なんか中途半端というかあやふやというか、進化の仕方おかしくねえ？」
一介のサラリーマンに政治家や科学者でも無理な話をされても困るのだが、その前に今の話で以前から気になっていたことに触れられたのでこいつに聞いてみる。
「以前から気になっていたんだがスカルよ。お前ら宇宙人は地球の何を輸入しているんだ？
作るというからには、人工物だろう？こうして惑星間を移動しているあたり、お前らの方が発展していると思うのだが。」
こいつは見た目３０代の日本人男性だが、れっきとした宇宙人であり、この姿は仮のものでしかない。
そんな、大怪盗も真っ青なフェイク技術や何より惑星間での移動まで可能な航行技術など、それこそ人間なんぞより優れた科学力があるはずなのだ。
そんな、ＳＦじみた連中が一体地球で何を仕入れているのか、以前から気になっていた。
「んー？鉱物って言えばいいかな？それも自然にある奴じゃなくて人工の加工された奴」
「鉱物？宝石とかか？人工のものは近年に入ってから作られたそうだが」
人工蛍石やビジマス鉱石など、見た目も綺麗なものを思い浮かべる。
宇宙では、こういった宝石類が貴重なのだろうか？
「いや、違う違う。そういう宝石類じゃなくてセラミックみたいな金属系。
車とか舟とか乗り物に使うの全般を仕入れてる」
「はあ？それこそ必要ないだろう？お前らがどうやって地球に来てる

のか知らないけど、ＵＦＯ？地球でいう宇宙船みたいなのだってあるだろう？」
　こいつが、ＵＦＯで来ているのか何らかのテレポーションで来てるのかは知らないが、どっちにせよ、地球よりもよっぽど上等な材料で作られているはずである。
　なんたって、宇宙を旅できるほどなのだから。
「ああ、なんか勘違いしてる人間が多いんだけど、〇〇〇ザざ＝＝あっと、えーＵＦＯ？はそんな丈夫な作りしてないんだ。
　宇宙空間はなんもねえからな、動きだしちまえばいくらでも動くし、邪魔なもんもねえから」
　・・・・？おかしな話だ。
　確かに宇宙空間には重力が無いから、一度動きだせば慣性でいくらでも動くというのは聞いたことがある。
　だが、惑星を出るまでは空気があるし重力もある。
　衛星軌道までには相当な衝撃に耐えるようになってるはずだ。
「えっと、〇〇ザざ＝＝？あこれもだめか、重力子っていうのかな？重力のベクトル（向き）やスカラー（量）を制御する方法があるんだよ。
　これがあれば惑星外に出るのも簡単だし、小惑星やデブリに衝突する心配もないわけ。
　だから、形さえ成形できれば丈夫じゃなくてもよゆうよゆう」
　こいつは日本語を話しているんじゃなく、宇宙の言語を同時翻訳しているので、日本語にないｏｒ地球に存在しない言葉にはエラーが出るようだ。
　というか、重力制御ができるのか。
　テレビ番組で、あり得ない動きをするＵＦＯ動画を見たことがあるから、納得のいく話ではある。
「というか、重力制御もできないのになんで飛行機なんか運用してるんだよ！
　ジェットの力で無理やり浮くとかわけわからん」
「そんなこと言われても困る。実際に航空力学を使って飛べているのだから、問題はないだろう？」

技術が劣っているのは１００も承知だ。
現状できる方法で飛べているので、これからの発展に期待してほしいのだが。
「いやお前、今の方法で飛んでたら、落ちたら死ぬだろう!?」
そりゃそうだ。
なるほど、重力をどう制御しているのか知らないが、こいつらはあらゆる衝撃から身を守れるから飛んでいるわけだ。
この世界の飛行機はこいつらの価値観でいうと、シートベルトのないジェットコースターみたいな感じなのだろう。
ここまで危険なら飛ぶな！というのは至極まっとうに聞こえてしまう。
「やっぱり、地球人っておかしいんだよ」
ジェネレーションギャップならぬユニバースギャップとでもいうのだろうか。
こういう視点が全く違う話を聞けるから、この喫茶店に通うのをやめられないのだ。
カフェ「Ｃｒｕｉｎｎｅ」。ここは変わった常連客が利用する。
少し変わった喫茶店である。

２話　カラフルな顔見知り

「喫茶店はいいものだ。」
注文したアールグレイを飲みながら、今日も俺はしみじみと思う。
普通の飲食店とは違う落ち着いた雰囲気。
飲食を楽しむお客たちも、騒がずそれぞれがこの雰囲気を楽しんでいる。
今は昼の１５時。少し小腹が減ったので、いつものアールグレイの他にニューヨークチーズケーキを注文した。
しっとりとした舌触りに、濃厚なチーズの旨味。
少ししつこめの味付けだが、紅茶と合わせるにはこういった味がよく合うと思う。
お皿の横に添えられているイチゴジャムも、酸味が程よくとてもグットだ。
こうして、美味しいケーキに舌鼓を打っていると、いつも見かける常連客が声をかけてくる。
今日店でたまたま出会った顔なじみは・・・・・・・「カラフルな宇宙人」だった。
「高宮さんもよく来ますよね、日曜日はいつもじゃないですか？」
高宮　凛、それが俺の名だ。
女みたいな名前をしているが、れっきとしたおっさんである。
「イヤー、すっかりこの喫茶店の紅茶にはまってしまってね。
軽食類も多いから、飽きずに通ってしまうんだ。
そういうネイキットさんも、結構な頻度でいますよね」
ネイキット、俺と同じくこの喫茶店の常連で、２０代後半の男性だ。
このネイキット、服装こそスーツ姿だが色合いがおかしい。
スーツの上が白色、ズボンが黒色で中のシャツは黄色。ネクタイは赤色である。
１００歩譲ってもスーツの上下は色を合わせないだろうか？
「なるほど、確かにここのサンドイッチは私も好きですね。
香ばしい食パンに挟まれたチーズやハムがたまらない」

そういって、ネイキットは手元のサンドイッチにパクつく。
ここのサンドイッチは、トーストされた食パンにハムとチーズが挟まれたシンプルなものだが、時々無性に食べたくなり、私もよく注文するメニューである。
「二人ともよく食うねえ、俺はこのコーヒーがあればそれで満足だよ」
となりに座るスカルが声をかけてくる。
そういえばこいつが軽食類を頼んでいるのを僕は見たことがない気がする。
「スカルさんに至っては、毎日いる気がしますよ。
仕入れのお仕事だってあるはずなのに、一体いつ仕事に行ってるんです？」
「最近はネットや電話のやり取りで、交渉が進められるからな。
それに例のウイルスで在宅化が進んで、ＰＣがあればどこでも仕入れができるんだよ。俺たちにとっちゃいい時代になったもんだ」
こうして話していると忘れそうになるが、こいつらはれっきとした宇宙人だ。
人間社会で大問題となっているウイルスも、対岸の火事状態なのだろう。
「そういうネイキットさんこそ、一体なんのお仕事をされてるんです？
あなたも結構な頻度でここに来てますよね？」
色彩がおかしいとはいえスーツを着ている以上、会社勤めなのだろうが、この人も地球に何をしに来ているのだろうか不明である。
「人間社会での仕事はやってないんですよ。
地球に存在する微生物や虫なんかの生物を母星に持ち帰って研究するのが、私の仕事です」
おっと、いきなり宇宙人的な話になってしまった。
スーツを着ているからてっきりサラリーマンかと思ったのだが、よくよく考えるとこんな派手な色彩の会社員など普通はいないか。
「ネイキットは惑星環境〇〇ザざ＝＝観察機構の研究員だからなー。
他の惑星の生態を研究して自分たちの星へ研究成果を持ち帰るの

が仕事だ」
スカルの奴が補足してくれるが、一部翻訳されない概念があるようだ。
まあ、研究者なのはわかった。
「へー、やっぱり地球の生物って宇宙人から見ると珍しいのか？
ネイキットさんはどんな生き物を持ち帰ってるんです？」
こうしてお話をしていると忘れてしまうが、宇宙人にキャトられるなどの都市伝説もある。
人間をさらっているとは考えたくないが。
「昆虫全般が多いですかね、トンボやハエ、バッタなど、色んな形をして面白いです。特にこの星の生き物が持つ目という器官は素晴らしい。
あなたたち人間も、同じ目に見えて国が違うと少し変わってくるんですよ」
なるほど目か、この人も人間に見えるだけで本体は人型ではないのだろう。
「なるほど、日本人は黒い眼をしてますが欧米では青いですしね」
何処の国の人間かを判断する分かりやすい差じゃないだろうか。
人と話すときは目を見て話すし、などと思っていると、ネイキットは変な顔をしている。
「○○??ザざーｋｕｒｏ???ａｏザざー???ぱっと見、人の目に変わりってないんじゃ？」
「???」
瞳の色は分かりやすい差だと思っていたのだか、なんだかネイキットに伝わらない。
というか黒や青という言葉が翻訳されていない？
二人してきょとんとした顔をしていると、黙って聞いていたスカルが笑いながら話しかけてきた。
「ははは っ!!高宮！
ネイキットに色の概念はないぜ！
「目」という器官が珍しいって言ってただろ？

光を観測する器官自体がこいつの星では存在しないのさ！」
??まあ、そういうこともあるのかもしれない。
今にして思えば、ネイキットとの話の中で香りや歯ごたえ形という言い方をしていたが、色について話した覚えはない。
??しかし、ネイキットの星には光源がないのだろうか？
地球でゆう太陽の位置付けの恒星が無ければ、生物自体が生まれないと思うのだが。
「恒星イコール高温だから光を発してるっていうのは、あくまで地球の常識だぜ？
宇宙にはある程度質量があっても、光を発してない恒星は結構ある。
でもエネルギー自体は発してるから、真っ暗でも〇〇〇ザざ＝＝っと、いけね。
地球でいう光合成？する生き物も存在してる。
でも光なく反射しないから、色という概念自体がないのさ」
「〇〇〇ザざ＝＝ですか？〇〇〇ザざ＝＝ならありますが、この目という器官はそのｈｉｋａｒｉ？というのを認識するためにですね」
なるほど、いつもネイキットさんがこんなカラフルな服装をしているのか、気になっていたのだが、色自体を認識できていなかったのか。
確かに服の形だけを見れば、普通のスーツ姿だし、本人の認識では周囲に溶け込めているのだろう。
まあ、とにかく
「ネイキットさん、これ食べ終わったら服屋にでもいきましょうか」
「???」
話しについてきてないこのカラフルな顔見知りに、まともな服を着せることから始めてみよう。
カフェ「Ｃｒｕｉｎｎｅ」。ここは変わった常連客が利用する。
少し変わった喫茶店である。

３話　チュパカブラ

「喫茶店はいいものだ。」

昼食を食べながら、今日も俺はしみじみと思う。

普通の飲食店とは違う落ち着いた雰囲気。

飲食を楽しむお客たちも、騒がずそれぞれがこの雰囲気を楽しんでいる。

俺は今日、ランチ目的でこのカフェ「Ｃｒｕｉｎｎｅ」に訪れていた。

この店の料理は普段、ケーキなどのデザート類と軽食以外にパスタやピラフなどのちょっとした品を提供しているのだが、お昼の１１時～１４時の間だけ、定食メニューが注文できる。

今日の目当てはエビフライ定食。

大きい２尾のエビフライに白身魚のフライ。

葉野菜の盛り付けにはプチトマトが添えられ、そばにはたっぷりのタルタルソースがついている。

定食にはご飯とみそ汁のセットがついてくるのだが、このみそ汁、大根やニンジン・豚肉の小間切れが入っており、ほぼ豚汁状態なのが嬉しいところだ。

みそ汁で口を湿らせ、少量のご飯を食べてからたっぷりとタルタルソースをつけたエビフライをほおばる。

ザクッ！

自家製のタルタルソースなのだろうか？
中のピクルスが粗くカットされているからか、歯ざわりがいい。

正直、美味しい料理はいつまでも食べていられる気がする。

「ごちそうさまでした。」
まあ、実際に食べ終わってみると程良い満腹感があり、適量であったと満足できるのだから不思議なものだ。

俺が食事を終え、一息ついているといつも見かける常連客が声をかけてくる。

今日店でたまたま出会った顔なじみは・・・・・・・・・・。

「ジュースおいしい。」

・・・・「チュパカブラ」だった。

「・・・・ルチェルさんって、毎回氷なしのジュースばかり飲んでますよね？」

ルチェルさんもこの喫茶店の常連でたびたび顔を合わせており、ひと月ほど前に都市伝説のチュパカブラの正体だと教えてくれた。

お腹が減り過ぎて正体がばれた上に、とっさにコヨーテのふりをしてごまかしたと言われた時は唖然としたものだ。

「この喫茶店は宇宙人向けの食事も出してるそうですが、ルチェルさんはたのまないんですか？」

ここの常連は一見すると人間に見えるが、正体を隠した宇宙人たちが愛用している。

俺が食べているような地球人向けの料理もあるが、多種多様な異星人向けメニューがあることから、ここでの顔なじみは大体が宇宙人なのだ。

「・・・・ああ、私たちＴ８Ｋ２６２８星の住人はジュースのような液体が食事になる。

というか、固形の食料自体を見たのがこの星に来て初めて」

そういうと、ルチェルさんは恥ずかしそうにひたいをかく。

このＴ８Ｋ２６２８という数値は、宇宙連邦できめられた惑星名称だそうだ。

「地球」や「火星」といった惑星個々の名称は、その星ごとの呼び方なので異星人同士のコミュニティーで伝わる統一名称を連邦間で定めたとかなんとか。

地球にも呼び名があるらしいのだが、残念ながら教えてもらったことはない。

「そういえば、都市伝説のチュパカブラも動物の体液を啜っているＵＭＡでしたっけ？」

こうして人間と同じ見た目をされると、この人たちが種族や星が異なることを忘れてしまいそうになる。

「というか『Ｔ８Ｋ２６２８星の住人』？

その言い方ではルチェルさんの種族だけじゃなくて、Ｔ８Ｋ２６２８星の生き物みんなが液体食糧を食べているように聞こえるのですが？」

そんなわけがない、地球だって哺乳類や鳥類。魚類に昆虫と様々な食事方法をする生き物がいるのだ。

「？そう？接種方法こそ違うけど、うちの星では生き物の体液が食事方法。

地球で言う食物連鎖のようなものこそあるけど、上位の種族は下位の種族の体液が食事。

正確に言えば、食物連鎖の１つ下の種族といえばいいかな？

人間のように肉や野菜を食べるんじゃなく、決まった種族の体液ばかりを吸う」

まあ、雑食ではなく肉食獣や草食獣のように決まったものしか食べないということだろう。

驚くべきは、その星の生物すべてがそのような食事をしているという点であろうか。

「というか、地球の生物が多用すぎ！

環境も場所によって違い過ぎし、５０度を超える砂漠もあればマイナス１００度近くにもなる南極もある。

なんでうちの星と同じく回転してるのに、そんな違う!?」

ああ、環境の違いは生物の進化に密接なかかわりがあるからか。

たぶん、ルチェルさんの星は惑星内での気温や環境がほとんど変わらないのだろう。

「『収れん進化』でしたっけ？

異なる種族にも関わらず、生物が同様の生態的地位についたとき

に、系統に関わらず類似した形質や特徴を持つことがある。
イルカとサメやアシカとアザラシとか、それが星単位でおこってるって感じですかね？」

どこぞで聞いた雑学を思い出しながら、ルチェルさんに確認してみる。
正直、同じような生物ばかりが産まれる惑星環境というのは、俺の常識では想像すらできないのだが。

「一部翻訳されなかったんだけど、だいたい当ってる。
うちの星って、地球に比べてなんか『のっぺり』してるの。
山や海とか天気や季節っていう概念もなかったし、初めて地球に来たときはすっごい驚いた（笑）」

まあ、地球に住んでいる我々すら夏や冬の違いにひーこらしているのだから、ルチェルさんにとっては死活問題だったろう。

「おかげでストレスが溜まっちゃって、来た当初はろくに食事もとれなかった 」

チュパカブラ事件の原因はそれか。

ストレスで食事がとれず、お腹が空きすぎて正体がばれたと。

というか、ストレスで食欲不振になるあたり、トカゲの生態に似てる気がする。

「でも、生き物の体液を摂取するって、効率的な食事方法だよ？
人間もそうだけど地球の生き物って、摂取した食料を栄養源に分解して血や肉を作ってるよね？」

確かに、地球の生物の多くは消化器官があり、食物は腸で摂取されやすいよう胃などで分解される。

「僕らは、摂取した体液をほぼそのままの形で摂取できて、体内の体液へも流用できる。

だから、消化に使うエネルギーがあんまりいらない！」

なるほど面白い。

人間の進化には、食材の調理に火を使うことで、消化によるエネルギー消費が抑えられたことも理由だと聞いたことがある。

対照的に、コアラなどは毒素のあるユーカリの葉を消化するためエネルギーを使い、1日の大半を睡眠で過ごすという。

星にいる生物全体が似たような進化をしているというのも重要だ。

生態的に同じような生き物ばかりなので、種族が異なっていても生体エネルギーの流用がある程度可能なのだろう。

ルーチェさんがコヨーテの真似事なんぞで人間をごまかそうとしたのは、生態のかけ離れた地球の動物の体液を啜ったことによるものだと思うことにする。

・・・・とはいえ。

「・・・まあでも、これは人間の勝手な感性でしょうが。

効率ばかりを求める食事方法というのは、なんだか味気ない気がします。

俺は食べることが好きなので、外国の変わった食べ物や食事方法なんかも興味ありますし、できれば宇宙の美味しい料理とかも食べてみたいです」

生物的な違いなのだから的外れな意見ではあるのだが、『効率的な食事』と言われると、なんだか悲しい気持ちになる。

多少のグルメを気取っている俺は、知らない料理があれば食べてみたいし、美味しいと感じた料理は人にも勧めたいタイプなのだ。

「友達として食事の話題で盛り上がれるのは嬉しいけど、実際問題難しいと思うよ？

生態的な部分ももちろんだけど、よその食文化というのはあまり触れない方が身のため」

ある生物にとっては美味しいものでも、別の生物にとっては毒ということもあり得る。

そう考えると、ルチェルさんの言う通り、よその食文化に口を出すのは良くないのだろうが・・・。

「・・・高宮だって、牛や馬のような宇宙人に『草を反芻した時の美味しさ』とか語られても、困るよね？」

そりゃそうだ!!

毒とか以前に、別のベクトルで大問題だった。

「・・・うん。この話題やめましょうか」

リアルに思い浮かべてしまったので、定食で食べた葉野菜のサラダが戻ってきそうな気がした。

今後、異星人と会話するとき、安易に食事の話題をするのはやめよ

うと思う。

食後の紅茶を頼みながら、俺はそう心に決めた。

カフェ「Ｃｒｕｉｎｎｅ」。ここは変わった常連客が利用する。

少し変わった喫茶店である。